慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本におけるファッシズムの概観
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.7 (1932. 7) ,p.1159(39)- 1205(85)
JaLC DOI	10.14991/001.19320701-0039
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19320701-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

此故に最近我國に於ける短期清算取引の著るしき發達は之が實物化に適當したるが故でなく、寧ろ之が投機取引に適し投機的妙味と投機的分子が大なるが故に外ならないのである。則ち短期取引開設の趣旨とは全く反してゐる結果である。尙此の外に短期取引の賣買高の增加した理由として見られるのは、短期取引には寄付大引の外にサラバがあつて絶えず取引が行はれること、並びに短期取引の上場株が增加したことに歸因することを忘れてはならない。例へば東京株式取引所で大正十三年に短期取引を始めて開始した時は僅かに新東株新鐘紡株の二種を上場したに過ぎなかつたは現在の上場株はに新東株・鐘紡新、舊、日糖新、明糖、大連株商、日魯、郵船新、麥酒新、淺野新、日産、日石、南滿新、東電、富士紙新、王子紙、の十六種（大連株商、日魯は賣買中止中）に增加してゐる。

日本におけるファッシズムの概觀

加田哲二

一

最近の日本における社會思想の特徴は、左翼社會思想と右翼社會思想の激烈な鬪爭に現はれてゐる。それは、マルクシズムの理論鬪爭であるとともに、マルクシズムに對する理論鬪爭である。この左翼思想と右翼思想の對立と右翼思想の變質――外觀的または內容的なる――にこそ、吾々は現代日本社會思想の特徴を見ることが出來る。

このことは、最近の日本の社會的情勢の上から明白に說明し得るとともに、その特徴の本質をも把握し得るのであるが、この社會的情勢とともに、社會思想、殊にマルクシズムにおける發展を觀察するとき、更によくこれを理解することが出來よう。

日本最近の經濟的並に社會的發展の段階は明白に獨占資本主義である。この段階に日本が入つたのは、歐洲大戰以後の現象である。現在の日本の社會思想、殊にマルクシズムは、この當時から一般に普及し始めて、今日に至つてゐる。世界大戰の結果による日本商工業の異常な進展（軍需品並に他國の獨占市場への侵入による）は、日本の工

業の大なる擴張であるとともに、日本資本主義における顯著な資本集積の事實として現はれた。資本の集積と生産の擴張は他方において無産者的要素の擴大である。このとき西洋諸國には、從來の資本主義に對する無産者階級の攻擊は顯著なるものがあり、その結果革命の波は全世界に揚つた。一九一七年のロシア革命、一九一八年における中歐諸國の革命があつた。我が國においても、生産擴張後における歐米生産界の漸次的回復とともに、恐慌の第一歩を歩み出してゐた。無産者層は、世界の革命的運動の高揚に、その前途に光を見たのである。彼等の「光」は社會主義であつた。社會主義は、このときから普及されるに至つたのである。

日本における社會主義はこの以前にもあつた。吾々は既に明治初年にソーシヤリズム、コムミュニズムの名稱の記されたこと知つてゐる。明治十年代にはロシア、ドイツの社會主義的無政府主義的テロリズムとこれに對する鎭壓策に關する幾多の新聞報道を見ることが出來るし、また二十年時代には、既に、社會主義に關する可成にまとまつた著述さへ見ることが出來る。三十年代には、社會民主黨の創立――創立直後結社禁止――や、その一黨の日露戰爭當時における反戰運動などがあつた。社會主義の陣營は可成に活氣を呈した。けれども明治四十二年の大逆事件は、その活動のすべてを壓殺せしめたものである。日本社會運動の暗黑時代は來た。この暗黑時代は、わずかに、大正七八年以來更生の路を辿つたのである。

大正七八年に社會主義更生した。しかしそれは、實踐としては極めて微弱であつて、主として啓蒙としての意義を持つてゐた。大正七八年以後に日本に流布した社會主義は種々樣々である。第一に從來の社會主義陣營から聞えて來たものは、社會民主主義の叫びであり、第二に政治的抑壓に對する反動としてのサンヂカリズムであり、アナアキズムであつた。英國のフェビヤニズムも、ギルド社會主義も紹介された。當時まだ誕生して間もない勞働運動の諸團體はこれらの社會主義思想に啓蒙された。それはまだ一個の統一的指導の原理たり得なかつた。それは寧ろ世界の革命運動の高揚に對するインテリヂンチヤの知識的反應を示したものと見るべきものである。

しかるに、一九一七年にその政權を獲得したロシア共産黨は、漸次に反革命運動を抑壓してプロレタリア獨裁を確立した。この共産黨のロシアにおける勝利は、その隣國たるわが國に絶大の影響を及ぼした。ロシアにおいて、マルクス主義政黨の政權は確立された。この事實は、マルクシズムの普及に大なるエネルギーとなつて現はれたのである。

いままで、單なるインテリゲンチャの知的反應に過ぎなかつた社會主義は、マルクシズムにおいて、大なる實踐性の存在を明確にして來たのである。かくの如きマルクシズムの實踐性は、諸他の社會主義を漸次に克服した。理論的にも、マルクシズムは、アナアギズムやギルド社會主義や、フェビヤニズムに優つてゐたし、その運動方法においても、優秀であつた。

マルクシズムが、啓蒙としての社會主義を克服し、その克服された勢力とともに、實踐的運動に向つたことはいふまでもない。たゞマルクシズムは、その現はれとして社會民主主義を持つてゐるし、また共産主義を持つてゐる。こゝにいふマルクシズムとはロシア共産主義を意味する。このマルクシズムは、社會民主主義とも闘爭した。社會

民主主義は、その發達上、普通には、成熟したマルクシズムといはれるものであるが、社會民主主義はマルクス、殊にエンゲルスが英米並に西歐諸國における民主主義政治の價値を稍評價し過ぎた點を更に强調して主張された議會主義である。しかるに、日本における無產階級の議會政治上における勢力獲得の可能性は殆んど皆無といつて差支ない。この點から、日本のマルクシズムは、パアラメンタリズムの社會民主主義を離れて、共產主義に向つたのである。無產階級そのものが、組織を缺いてゐるところには、非議會主義の傾向の現はれるのは當然のことといつて差支ない。かくの如くして、日本のマルクシズムは、共產主義の意味において、社會思想界を殆んど占領したといつてよい。その占領は、大正十二年の震災當時までに完成された。

二

マルクシズムによる日本社會思想界の占領は完成されたのであるが、日本のマルクス主義陣營內及びその外部からの論爭はこれから一層の激しさを加へたといつてよい。これまでのマルクシズムは單なる紹介であり、その思想體系の優秀なるが故に、他の社會主義を克服し得たのである。今や、マルクシズムは、その競爭的思想との鬪爭ではなく、マルクシズム內部における認識の進展に關する鬪爭と、マルクシズムを敵とする階級の理論的鬪爭を行はねばならなかつた。この鬪爭過程こそ現代日本の社會思想の特徵を語るべきものである。

周知のやうに、マルクシズムは單純な思想體系ではない。それは今日まで樹立された思想體系中最も複雜なものである。それは理論的體系であるが故にまた實踐的體系であると考へられてゐる。理論においても、それは唯物辯證法の哲學を基礎とする巨大な世界觀にその基礎を置く。

先づ日本におけるマルクシズムは經濟理論として紹介された。その基礎は勞働價値論及び餘剩價値論である。マルクシズムの理論として價値論が重要性を持つてゐることは、否定出來ないが、その最も基礎的なものでないことだけはいへる。第二それは唯物史觀として、紹介された。その紹介は極めて素樸な唯物史觀であつて、その基礎である唯物辯證法には未だ觸れることがなかつたのである。要するに、日本におけるマルクシズムの紹介は、マルクシズムの斷片的紹介であつた。從つて、これに對する反對者側の論爭も、またさうであつた。マルクス價値論に關する論爭は、數年の長きに涉つて、マルクス主義者と反マルクス主義者との間に行はれたが、それは、マルクス主義から遊離した價値法則の論爭であり、殊に反對者側にも、擁護者側にも、マルクス價値論を論ずるに當つて、資本論の構成をも顯みぬ者さへあつた。唯物史觀についてもさうである。單純な物質一元論を主張したり、物心二元論によつて批判したりするか、または、經濟に對する倫理を强調するといふやうな道德的立場に過ぎなかつた。

この斷片的マルクシズムに對して、統一的觀方を敎へたのは、唯物辯證法に對する注意の喚起であつて、それは、福本和夫氏の貢獻である。福本氏の立場は今日においては、珍らしい觀方でもないし、それが若干の誤謬を持つてゐることは、廣く指摘されるところであるが、彼がマルクシズムを一の哲學として解釋し、これを體系的に理解しやうとした點は、日本マルクシズム史に特筆に値するものでなければならぬ。

マルクシズムの統一的把握は、その實踐運動としても現はれてゐる。左翼無產政黨の活動がこれである。而して、

マルクシズムの統一的把握は、現在においても、尙ほ多くの論爭の餘地を殘してゐるが、マルクス主義の他の思想に對する理論鬪爭を旺盛ならしめた。マルクシズムは、單に資本主義經濟を解剖批判するのみでなく、その上層構造に屬するものにその批判の眼を向けて來た。

マルクスのマルクシズム構成は、宗教批判哲學批判から始まつて、政治批判、社會批判に終つてゐるが、日本におけるマルクシズムの活動は、社會の基礎事實たる經濟の批判に始まり、政治に至り、その他のイデオロギーに及んでゐる。即ち資本主義經濟の批判は、マルクス主義がまだ紹介の時代から始められてゐるが、今やそれが無產政黨（合法及び非合法の）として活動するに及んで、政治の批判に移つた。しかして更らに文藝の批判、宗教の批判に至つてゐる。

わが國におけるプロレタリア文學の主張がわが文學に與へたショクは甚だ大であり、文學の社會性並に實踐性を明確にしたものである。それは感情の上からのマルクシズムへの教育とした效果がある。現在では、その流行期を過ぎて、稍不振の狀態にあるが、嘗ては「太陽のない街」の如き佳作を出してゐる。社會的行動に對する感情の重要性を認識するものは、このマルクス主義における文學批判並に文學的創作の重要性を認めねばならぬ。

宗教批判は、反宗教運動として現はれてゐる。宗教の阿片性を暴露し、宗教の階級的利用に反對して、民衆を諦めから自覺せしめるにおいては、重要な文化鬪爭である。この點においても、マルクス主義の果敢な鬪爭が既成宗教家に與へたショクはまことに大である。

かくて、マルクシズムの現代社會に對する批判は、一應その全體に引き涉つた觀がある。それは、經濟、政治、藝術、宗教の全體に涉る綜合的批判が成立し來つたのである。

この綜合社會批判は、マルクス主義における實踐性を呼び覺ました。マルクス主義は、その理論鬪爭を如何に、遂行しその實際運動を如何にすべきかを考察せねばならぬ段階に達した。近年におけるマルクス主義陣營における戰術研究はこの現はれである。從來のマルクス主義は殆んどその全部を理論の研究と實際運動に費して來たが、現在のマルクス主義はその實際運動における戰術の問題を重要視するに至つた。このことは、マルクス主義の運動が既に理論の時代から實踐の時代に移つたことを示してゐる。この事實の反面の證明としては、昭和三年以降の極左翼運動の彈壓等を擧げることが出來るだらう。要するにマルクス主義は理論の問題であるとともに、實際の問題となつたのである。

以上の叙說は本論に對する序論的の意味のものに過ぎないから、詳細を盡してゐない。この方面における詳細を知らんとする方は次の參考書を見られんことを望む。但し、この參考書目も手に入り易いもののみを擧げて置いた。

一　石川旭山（三四郎）幸德秋水補　日本社會主義史　平民新聞　明治四十年　一月二十日――同年三月二十四日まで連載、明治文化全集　社會篇　三三一――三七〇頁

二　石川旭山　社會主義史　新日本史　第四卷　萬朝報社發行　所收　この一文は第一の增訂

三　片山潛、西川光二郎共著　日本の勞働運動（明治三十四年）　明治文化全集　社會篇　一六一頁以下

四　山路愛山　現時の社會問題及び社會主義者　獨立評論　明治四十一年　明治文化全集　社會篇　三七一頁以下

五　日本社會主義文獻　第一輯　大原社會問題研究所編
六　横溝光暉著　增訂　日本社會主義運動史講話　昭和六年
七　社會科學特輯　日本社會主義史　改造社　昭和三年
八　岡陽之助著　日本社會運動史　昭和二年
九　河野密著　わが國に於ける勞働問題　昭和六年
一〇　赤松克麿著　日本勞働運動發達史　大正十四年
一一　松岡稔著　日本勞働組合運動發達史　前編　昭和六年
一二　淺野研眞述　日本勞働運動小史　大正十五年
一三　大田黑年男編　日本左翼運動小史　昭和四年
一四　河野密等著　日本無產政黨史　昭和六年
一五　古賀進著　最近日本の勞働運動　大正十三年
一六　磯村秀次著、日本勞働組合評議會史　二冊　昭和七年
一七　野田律太著　評議會鬪爭史　昭和六年
一八　小泉保太郎著　左翼勞働組合運動　昭和五年
一九　白揚社編輯部編　日本共產黨小史　昭和六年
二〇　山田藩三郎著　日本プロレタリア文藝運動史　昭和五年

三

マルクス主義の普及は所謂「思想國難」を意味するものである。三・一五事件に際して時の首相田中義一氏は、次の

如き聲明をなしてゐる。「事件の內容は金甌無缺の國體を根本的に變革して、勞働階級の獨裁政治を樹立し、その根本として力を勞農ロシアの擁護及び各植民地の完全なる獨立等に致し、以て共產主義社會の實現を期し、當面の政策として、革命を遂行するにあつたのである。而も、國體に關し、國民の口にするだに憚るべき暴虐なる主張を印刷して、各所に宣傳頒布したるに至つては、不逞狼藉、言語道斷の次第で天人俱に許さざる惡虐の所業である。」（註一）而して何故にかゝる國家の基礎を危うせんとする險惡の思想が發生したかといへば、それは「輓近外來惡思想の流傳」されたことであり、その「甘言美辭の誘惑」にある。故に「政府は今回の事件を機とし、各方面にわたり、更に最善の擧措を施し、殊に文敎の振興を謀り、青年學生を善導して、拔本塞源の道を講じたいと思ふ」といつてゐる。（註二）當時の文相水野錬太郎氏も同樣の訓令を發してゐる。（註三）後に濱口雄幸氏の如きも、その著述において次のやうにいつてゐる。「我々は政治上敎育上及び社會上、その他諸般の施設を講じて益々國體觀念の涵養に留意し、國民精神の作興に勉め又公明なる政治を行ふことに依て、國民思想を啓導する事に專念致して居るのである。之と同時に　苟も我國體の大本を破壞せんとするが如き、不逞不法の行爲を爲す者に對しては、法の命ずるところに從ひ、斷乎たる態度を以て、徹底的に之が取締を勵行して居るのである。然るに、近時青年學生にして、共產黨事件に連座せる者多數を見るに至りましたことは實に聖代の不祥事でありまして、邦家のため、深憂に堪へざるところである。吾々は此の際、特に意を敎育に用ひ、青年學生の思想を善導して健全なる知識の修得と訓育の徹底とを期せんが爲、夫々適切なる對策を定め、以て敎育の眞目的を達成するに努力しつゝある次第である。」（註四）

（註一）昭和三年四月十一日發表の聲明書

（註二）前掲　聲明書

（註三）昭和三年四月十七日　官報　地方官及び諸學校に對する國體觀念の涵養の訓令

（註四）濱口雄幸　強く正しく明るき政治　昭和五年版　四五頁

これらの政治家の言葉は、社會主義運動全體に對して述べられたといつてよいのである。それは所謂思想の善導を意味するが、政府の社會主義取締は單に思想善導のみではない。この所謂精神的誘導の外に、特別高等警察がある。「特高警察事務は明治三十年頃社會主義運動取締の爲に發生したものであつたが、明治四十三年の日韓併合以來朝鮮人の獨立運動が各地に於て企圖せらるゝに及び在留鮮人の取締が特高事務に包含せられるに至つた。更に大正三年頃からは近代的勞働爭議が頻發し、大正八年頃からは小作爭議に殆ど全國に涉つて發生し、更に續いて、大正十一年からは水平社運動が全國的に捲起された爲に、勞働運動・農民運動・水平運動が又々特高事務に包含せられるに至つた。一方社會主義運動は、ロシア革命の完成、第三インタアナショナルの成立以來、勞働運動・農民運動・無產政黨運動・學生社會運動・水平運動等の內部に、共產主義に深く喰入り、日本社會運動の本流を形成し　猖獗を極めるに至つた爲に、特高事務は益々その範圍を擴大されると同時に、その主力が共產主義運動の取締に傾注されるに至つたのである。」（註五）

（註五）栗原隆平、尾形半共著　特高警察要綱　昭和七年五月　二頁

かくの如き政府による社會主義並に社會主義運動に對する取締りとともに、社會主義と對立的關係にある所謂右傾團體が存在してゐる。所謂右傾的國粹的傾向は、明治初期の文明開化の輸入時代から存在するが、今日所謂國粹的團體として、最近の社會思想と最も關係の深いものは、大正六七年のデモクラシーの運動の盛となつた頃からの系統である。今日の右傾的國粹的團體の系統は次のやうに分類される。

一　玄洋社、黑龍會系統（頭山滿氏內田良平氏）

二　考壯會、猶有社系統（北一輝氏大川周明氏）

三　經倫學盟系統（上杉愼吉氏　高畠素三氏）

四　國本社、勤王聯盟系統（平沼騏一郎氏　荒木貞夫氏）

五　時局轉向派（赤松克麿氏　下中彌三郎氏）（註六）

（註六）三宅正毅　愛國主義運動の諸潮流と人物　文藝春秋　昭和七年六月號　一六五頁

これらは、現在において多少の勢力を有するものであり、且つ多少の思想的根據を持つものであるが、所謂國粹團體發展の過程、殊にその反社會主義的活動を主とした中には、通俗的な國粹主義從つて排外主義以外の何ものをも持たないものが多い。而して、これらの國粹團體は、「一九三一年即ち滿蒙戰爭以前の日本資本主義の發展期乃至は相對的安定期における所產であつて、それらの團體は、實踐的にも、形式的にも、反資本主義的色彩は全然認められなかつた。外形上は、封建的な「血盟」「仁義」を根幹とする「俠客」「國士」「志士」の集團の如く見られたが、實質的には、勞働組合、農民組合、無產政黨等の資本主義的諸勢力の擡頭と發展に伴ふて、その對立物として資本主義的勢力の一翼として成長存續し來つたのである。」（註七）今かくの如き國粹團體の主なるものを擧げれば次の如くで

ある。

黑龍會　明治三十四年一月創立。內田良平、伊東知也、葛生能之等の諸氏を幹部とする。要するに、帝國主義的政策遂行に資せんとするものである。別に對支研究會、國民外交同盟會等を作る。その反社會主義活動は、大正六七年頃大阪朝日新聞赤化事件に始まる。

浪人會　明治四十一年創立。中心人物は三浦梧樓、頭山滿、佐々木安五郎、美和作次郎、古島一雄、小川運平、野添宗三等の諸氏である。大阪朝日新聞事件、並に吉野作造氏のデモクラシーに對する反對運動によつて、進歩的思想に反對する。

デモクラシーの興隆、社會主義の普及――これは同時に資本主義の發展及びその內的矛盾の發展を意味する――とともに、反社會主義國粹團體は勃然と起つて來た。大正七年には、皇道義會、大正赤心團、老壯會が生れ、大正八年には大日本國粹會、縱橫倶樂部（早大）猶存社が生れた。猶存社は、今日の國粹主義に對しても、多くの意義を有する。その代表的人物は、大川周明、滿川龜太郎、鹿子木員信、北一輝の諸氏であり、これらの人々は今日においても尙ほ日本主義の思想家として活動しつつあるからである。猶存社はその機關誌「雄叫び」における宣言の一節に次のやうにいつてゐる。「吾々日本民族は人類解放戰の旋風的渦心でなければならぬ。從つて日本國家は吾々の世界革命的理想を成さしむる絕對者である。日本國家の思想的充實と戰鬪的組織とは、此の絕對目的のために、神其の者の事業である。國家は倫理的制度なりと云ひしマルチン・ルーテルの理想は今や日本民族の國家に於て實現されんとする。眼前に迫まれる內外の險難危急は國家組織の根本的改造と國民精神の創造的革命とを避くることを許さぬ吾々は日本そのものの爲めの改造又は革命を以て足れりとするものでない。吾人は實に人類解放戰の大使徒としての日本民族の運命を信ずるが故に先づ日本自らの解放に着手せんと欲する。」かくては彼等はその綱領として次の七項を掲げた。一、革命日本の建設、一、日本國民の思想的充實、一、日本國家の合理的組織、一、民族解放運動、一、道義的對外政策の遂行、一、改造運動の聯絡、一、戰鬪的同志の精神の鍛練がこれである。しかしながら、猶存社は大正十二年二月に解放された。（註八）

（註七）　勞働事情調査所編　最近の我國社會運動　昭和七年五月刊　四〇一頁

（註八）　協調會編　最近の社會運動　昭和四年刊　六六〇――六六一頁

大正十年一月には大和民勞會が創立された。國粹會とその性質を同じくするものであつて、それから分れたものである。國粹會とともに、反動的實踐團體として知られてゐるが、その活動においては、國粹會が一層活潑であつた。同年十一月には、大日本赤化防止團が成立した。その綱領の一に「赤化は社會秩序の根底を破壞し、人類幸福を呪詛するものなるなるが故に、本團は一死を以て之が防遏に任ずべき事を誓ふ」といつてゐる。（註九）

（註九）　最近の社會運動　六六三頁

大正十二年には經倫學盟（上杉愼吉、高畠素之兩氏）皇化倶樂部、國民軍事研究團、大正十三年には、國粹會の分身櫻花會、勤王聯盟、青年急進黨（遠藤友四郎氏）恢弘會（在鄕軍人善導機關）行地社（大川周明、滿川龜太郎兩氏）等

が設立された。大正十四年には七生社が東京帝大内に組織されて、社會科學研究會と對立した。大日本正義團が酒井榮藏氏によつて組織された。大正十五年には、建國會が組織された。その綱領の中には次の如きものがある。「一、我等は日本民族の傳統的道德を繼持し、輕佻浮薄を排し、實質剛健の美風を作興せんことを期す。一、我等は國家によりて、國民生活を統制し、日本國民の天皇の赤子として平等なる所以を徹底し、同胞中一人の不幸不平なるものなからしめんことを期す。一、我等は各人の有する財產、地位、階級、職業、知識、技能、筋肉が皆國家の爲に存在することを確信し犧牲の精神に依りて、極度に之を國家社會に奉ぜしめんことを期す。」かくの如き綱領の下にそれは、常に、共產主義撲滅、ロシア赤化の排擊、左翼無產政黨及び組合の絕滅のために活動してゐる保守的反動團體の典型的なものである。(註一〇)

（註一〇）最近の社會運動　六六六頁　本節の國粹團體に關する記述は主として最近の社會運動六五七――六六八頁による。

これらの諸團體が反社會主義團體として活動し、また勞働運動の反對者として常に現はれたことは、その發生の過程から見ても明かである。その大部分は、世界大戰後の革命的昂揚が日本を襲ひ、廣汎な階級鬪爭が遂行されつつあつたときに、起つたものである。それらは、最初から勞働者階級に敵對するものとして、ロシア革命に恐怖した反革命の組織として生れて來た」のであつて、今日のやうに社會的狀態が切迫してゐなかつたので、彼等は反革命を形成する封建的關係に基礎を置く沒落的分子に外ならなかつた。(註一一)

（註一一）日本に於けるファシスト政黨とその運動　產業勞働時報　昭和七年三月號　五〇頁

四

右の國粹的右傾諸團體は、資本主義の向上期または相對的安定期において、反社會主義運動に從事したものがあつて　その多くは綱領の如きも、抽象的通俗的國粹主義以外の何ものでもなかつた。たゞそれは社會運動勞働運動を打破抑壓することをその使命とするに過ぎなかつたので、殊に實踐的並に暴力團的傾向を有するものは、積極的にその組織を擴大し、その主義を宣傳する必要がなかつた。それは臨機應變的に社會運動と鬪ひ、その勢力を減殺すればよかつたのである。

しかるに、資本主義は永く安定期に止まることを許されなかつた。ヴァルガは日本の經濟恐慌について、次のやうにいつてゐる。「日本は、イギリスと同樣に戰後に於いて、好景氣に惠まれなかつた一聯の資本主義國の、その一つをなしてゐる。戰時中、或は又戰爭直後に日本がそれ以來絕えて再びまみえる機會を得なかつた。最近の三ケ年は、一九二七年の深刻な銀行取付けの痛手の下に呻吟し、經濟生活は、國家の示す莫大なる支持にも拘らず、この手傷を此處數ケ年の中に癒やし切ることが出來なかつた。尤も一九二八年と一九二九年とにおいては、經濟狀態は稍々改善されてはゐるが、併し、それも好景氣と言ふには、可成り遠いものであつた。世界經濟恐慌には、その發生と同時に日本は捲きこまれてゐた。日本の資本主義的體制が一般的に脆弱であるために、恐慌は、其處においては特に鋭い形を採つてゐる。」(註一二)

（註一二）ヴァルガ　日本經濟市況の分析　茂森唯士譯　日本經濟恐慌の研究　昭和七年四月刊　六一頁

この事實は、吾々が數字を以て示すことを要さない周知の事實である。日本における經濟恐慌對策は、金融對策となり、合理化政策となつて現はれたが、それらの政策はこの恐慌を緩和するものではなかつた。かくて　日本資本主義は、その特殊權益圏としての滿蒙を考へた。この特殊權益圏は支那批評家もいふやうに「實に日本資本帝國主義の最後の原料場兼市場であり、又斷末魔に於ける一椀の延命湯でもあるのだ。斯くの如く滿蒙の魅力が日本に對する日本の勢力が滿蒙に對する、火と油は他日一大火焔を擧げて極東の天を焦すの日無しと誰が斷言し得よう。」（註一三）滿蒙の經濟的意義についてのかくの如き認識は殆んどすべての日本當事者並に批評家の認めるところであり、（註一四）この根據の上において滿蒙事變は既に豫想されつゝあつたのである。穩健なる經濟問題解說者としての「日本經濟年報」は事變以前に次のやうにいつてゐる。「本年第二四半期（昭和六年四月―六月）には滿洲に關する事件や問題が特に多かつた。それらは……中日の利害の根本的對立に基くものであり、概して云へば、國民政府の利權回復運動と日本側の滿洲純植民地化運動との正面衝突が各々の部面に現はれたものに他ならぬ。さうして注目すべきは此等の諸事件諸問題の喧傳と共に、軍部が政府部内の摩擦混亂を敢てしても、その積極政策を遂行せんとする強硬な態度を示し來つたことである。聞くところによれば、此の間、某調査局の某氏を中心として積極主義的の一團體が組織され、少壯軍人を多數メンバーに加へ、一種のファッシスト團として發展せんとしつゝあるといふ。……唯斯樣な風聞の生じたことにすら、滿洲問題の次第に重大化しつゝある形勢を讀者と共に確認したいと思ふのである。」（註一五）許興凱氏の豫想は約一年數ケ月以前、東洋經濟新報のそれは約一ケ月前である。而して九月十八日の滿鐵線路爆破を機緣とする滿洲事變に對して日本の輿論は何故に吾々の見るが如く熱狂與奮したのであるか。「それは資本主義日本の國民經濟に行詰りを生じたためである。國民經濟の行詰りを意識して焦慮する日本の資本家及勞働者農民は、一九二九年秋以來の世界的經濟恐慌に襲はれて一層苦しんで居るところに、支那殊に滿洲に於ける政權の馬車馬的な對日進攻が起つた。日本國民中の廣汎なる層から支那に對する强硬政策を支持する輿論が極めて短期間に湧き起つたのは實に前記の如き餘儀なき理由によるものであり、隨つて餘程の決心と用意とを有するものに非ざる限り、これを抑壓することは出來ない。」（註一六）

（註一三）許興凱著　松浦珪三譯　滿蒙と日本帝國主義（原著一九三〇年刊）　昭和七年二月刊　三九〇―三九一頁

（註一四）大阪對支經濟聯盟著　滿蒙の我權益　昭和七年二月刊　一三―一四頁　その他の著述を見よ。

（註一五）東洋經濟新報社編　日本經濟年報　昭和六年第二四半期　第五輯　八月二十八日刊　二六一頁　サヴェート・ロシアにおける有力新聞「プラウダ」も日本帝國主義の滿洲進出を準備のある行動としてゐる。「日本帝國主義の滿洲進出」　インタアナショナル　昭和六年十一月號　滿洲事變に關する日本の左翼的見解は、「プロレタリア科學」（昭和六年十二月號）九四頁以下、その豫想については、梁谷進「日本帝國主義の戰爭準備」（同上、昭和六年八月號）中山耕太郎「東洋政局と日本の地位」（同上昭和六年七月號）を參照。

（註一六）橘樸編　滿洲と日本　昭和六年十一月刊　一七一頁

滿洲問題は日本資本主義にとつて單なる直接の經濟問題のみを意味するものではない。「日本經濟年報」は「滿洲問題の要因とその主要方向」を次のやうに規定してゐる。「一、日本資本主義にとつて原料資源獨占市場乃至植民地的

利潤獲得地としての滿洲の絶對的重要性、二、從つて日本の絶えざる帝國主義的進展、三、右に對する中國官民の不斷の反抗及列强就中アメリカの日本に對する抗爭、四、ソヴィエット同盟なる衣を被りしロシアの再登場、五、要約して滿洲の政治的及經濟的不安定及將來の危險。だがここに尙ほ逸脫した重要な事項がある。それは滿洲に於ける農業問題であり、農民と勞働者との問題である。從來と雖も、地主軍閥の封建的搾取と列國帝國主義の植民地的搾取とに惱んでゐた彼等は最近の世界恐慌の打擊で一層の生活窮乏を來した。こゝに中國共產黨の影響擴大の動機がある。……これはやがて全滿洲に現はるべき滿洲問題の一主要方向と思はれる。ソヴィエット同盟の新衣を纏ふたロシアの再登場は茲に一層の意味をもつ。」（註一七）故にこれらの問題殊に滿洲における社會運動とソヴィエット同盟の問題が滿蒙のプロレタリアート（約五十萬と推算される）と貧農との運動の目標であると同時に、帝國主義ブルジョアジーの標的でもあるとせられてゐる。（註一八）而して、現にかくの如き狀勢を進行しつゝあるのである。（註一九）

（註一七）日本經濟年報　昭和六年第一四半期第四輯　五三―五四頁

（註一八）プロレタリア科學研究所　中國問題研究會著　增訂　支那問題講話　昭和六年三月　二八二―二九四頁

（註一九）產業勞働時報　第三十六號（一九三二年）九頁以下

五

これが滿洲事變を中心としての意義である。この事實は、その意義において單なる張學良軍隊と日本守備軍の衝突を意味するものでないことは旣に明白である。日本の經濟狀態に顧みて、日本はその確保した特殊權益を更らに有效に用ゐんとするにあつた。それは國內狀勢の外部的解決策の一を意味する。最近の日本においては、すべてが行き詰りである。日本社會現下の特性の一は、「社會生活を何とか根本的に改革しなければどうにもならない、といふ氣持ち、要求が、何人の頭の中にも底深く養はれて來たといふことです。少し位の改善ではどうにもなるものでない。應急手當では病氣はなほらない。この病氣の原因はもつとずつと深いところから來てゐるものであるから、それに大手術を施さなければならない。その大手術を回避してゐると、却つてどういふ事態を釀すか分らない。今は生きるか死ぬかの瀨戸際に立つてゐるのだ。この大改造は今となつては避けられない勢ひだ。――かうした考へが社會大衆のすべての人の腦裏にふすぶすといふつてゐる。」（註二〇）このことは事實である。保守的國粹主義者もまた改造の避け難きを主張する。

「爾來日本の國情は、巨巖の急坂を下るが如きものがある。貧民と富豪との敵視、小作人と地主との確執、勞働者と資本家との抗爭は年と共に深刻を加へ、最早溫情主義などを以て如何ともすべからざるに至つた。この國民生活の不安を救ふためには、幾多の缺陷を明らさまに暴露せる資本主義經濟機構に對して、巨大なる斧を加へねばならぬことが明白なるに拘らず、富豪階級と權力階級との多年に亙る惡因緣はついに徹底せる改革の斷行を妨げて、唯だ一日の安を偸む繕縫的政策が繰り返されるだけである。曾て萬惡の源なるかに攻擊せられし藩閥政治は亡び去り、專制頑冥と罵られたる官僚政治また亡び、今や明治初年以來の理想なりし政黨政治の世となつた。而して國民は早くも政黨に失望し、その心に新しき政治理想を抱くに至つた。政黨もまた權力階級、黃金階級に有利な

る政策を行ひ、眞個に國民生活の安固を圖らうとしない。かくて國民は國家生活によつて何等積極的幸福を享受せずと感ずるに至り、茲に非國家又は反國家思想が受け入れられ、必然忠君愛國の念が薄らいだ。それ故に吾等は、日本を支配する邪まなる黄金の勢力を倒さねばならぬ。……黄金の不當なる壓迫より國民を解放することが、いまや君民一體の實を擧ぐべき無二無三の途となつた。やがて來るべき第二維新に於て倒さるべきものは黄金を中心勢力とする閥、然り斯くの如き閥を生むに至れる制度そのものであり、興さるべき者は貧苦に惱む多數の國民である。」（註二一）

（註二〇）土田杏村著　現代世相論　昭和七年六月刊　七―八頁

（註二一）大川周明著　國史讀本　昭和六年九月刊　二七八―二八一頁

土田杏村氏は一昨年の秋に既に國粹社會黨の提唱者であり、（註二二）大川周明氏が「猶存社」その他の國粹團體の指導者であることもまた周知の事實である。これらの國粹主義者達すら何等かの社會改造を要求しなければならぬ程度にまで今日の狀勢は達してゐる。進歩的立場にある社會運動が彼等の運動よりも、より一層活潑な活動を續けてゐることは、吾々の日常の新聞雜誌において見得るところである。無産政黨は甚だ不振である。それは選擧政黨としては僅かに、數名の代議士を議會に送つたに過ぎないのである。而して、かゝる無産政黨の狀態は、無産政黨運動に從事してゐるものからさへも無爲無能の批判を聞かされねばならぬ狀態である。最近所謂共同戰線黨から國民社會黨準備會に轉じた近藤榮藏氏はわが無産政黨に對して次のやうな批判を下してゐる。「一、共産黨は目下のところ問題とならない。二、社會民主主義の政黨は、これ亦屍同然である。三、共同戰線黨は分裂主義『福本イズム』に對する反撥運動として起り、日本無産階級組織の『小さい破片』までを兎に角にも拾ひ集めて保存した點において功績は充分に認められるが、その存在の意義は正に此處に止まり、プロレタリア階級が更らに政治的大飛躍を遂げねばならぬ現在の時期に當面しては、その本質並に組織の缺陷上全く無能化されて、これも亦廢物の域に入つた。」（註二三）かくの如き無産政黨の批判は國民社會主義への轉向といふ一の立場から爲されたものであるから、これをそのまゝ受け取ることは出來ぬ。しかしながら社會主義並に共産主義に立脚してゐる合法非合法の政黨が現時の無産大衆の欲するところを明確に代表してゐるか否かは餘程の問題とすることが出來よう。故にこれらの無産政黨の不振をもつて、わが國の無産大衆が何等社會主義的要求を持つてゐないと見ることは不當である。かくの如き觀方に最も贊成するであらうところの所謂有産者並に識者が最も多く大衆の思想並に行動の惡化を叫び、思想善導の必要を強調してゐることが、そのよき證據でなければならぬ。

（註二二）土田杏村　日本に於ける國粹社會黨の可能性問題　「祖國」　昭和五年十一月號　〈現代世相論　二九七頁以下

（註二三）近藤榮藏著　無産黨出直すべし　昭和六年十二月刊　一九頁

恐慌による勞働者階級への打擊は甚だ大である。一九三〇年十月の國勢調査は失業總數を三十二萬二千五百二十七人としてゐるが、この數は素より過少の計算である。「エコーミスト」は、一九三〇年春既に百三十萬に推算してゐる。（註二四）一九三〇年において、レキヤノヴァによれば、日本は百五十萬の失業者を有し、彼の論文の記するとこ

ろによれば　日本の左翼勞働團體の報告は二百萬以上としてゐるのである。（註二五）ナウマンも同時期において百五十萬說を採つてゐる。（註二六　これらの失業者は如何にして生活してゐるか。「現在の經濟恐慌にあつては、日本における失業も又多くの場合長期に涉る性質を多分に採つてゐるから、勞働者が解雇手當として受けた僅かな金は全く意味をなさない補助となつてしまふのである。失業者の大部分の者は……その生れ故鄕に歸つて更でだに苦しい農村の住民に對して、一層の重荷となつてゐる。他の部分は都市に止まり、餓と窮乏との苦を嘗め、時偶有りつく賴りない勞働によつて辛うじて糊口を凌いでゐるのである。」（註二七）而して僅かに職に止まり得た者でも、勞働時間の延長による勞働强化、賃銀値下、減俸をもつて、その生活を著しく低下せしめられ、その生活の不安を極度に感じてゐる。

（註二四）　エコノミスト　一九三〇年七月十五日號

（註二五）　レキアノヴア　日本に於ける失業　山本征夫譯　第三期失業問題　昭和六年十月刊　一三四頁

（註二六）　ナウマン　一九三〇年の世界失業　產勞プロ科學共譯　失業及び失業反對鬪爭　昭和六年七月刊　八五頁

（註二七）　ケイ・ヒスフエルド　日本に於ける失業問題　前掲　日本經濟恐慌の研究　八九―九〇頁

都市における工業勞働者の失業歸村者をも養はねばならぬ農村の狀態が如何なる有樣であるかは、今日あまりに周知の事に屬してゐる。農村の窮乏は、全體としての農村の窮乏を意味するとしても、その內部的關係の對立狀態を吾々は忘れてはならぬ。この中產以下の農民窮乏について、吾々はそれをこゝに語る必要はない。農村における窮乏實話はこれを雄辯に示してゐる。（註二八）

（註二八）　久保寺三郎著　農村の崩壞　昭和五年十二月刊　稻村隆一著　日本の農村を語る　農村婦人哀史　昭和六年十二月刊等を見よ。

中小商工業者はどうか。「現在の恐慌過程は銀行資本と結合し得ない條件の下にある中小企業の沒落過程でもある。」（註二九）この問題についての專門家は次のやうにいつてゐる。「諸々の救濟策、打開策、轉換策、更生策等々――その多くは『かけ聲』政策に終つてゐるが――にも拘らず中・小商工農業者は、とくに金解禁を契機として急速な沒落曲を奏しつゝある。したがつて彼等の多くは好むと好まざるとにかゝはらず、大衆的にプロレタリアないし、セミ・プロレタリア化しつゝある。とくに彼等の子弟に至つては大部分その父兄の意志、意欲、期待に頓着なく、プロレタリアないし、セミ・プロレタリア化した。最後に中・小業者の分解作用――ブルジョアジーの完全な隸屬のものにブルジョアジーの發展を自己の發展と同一視するものと、反ブルジョア的精神にめざめたものとの分裂作用――が、かつてみられないほどハツキリしてきた。」（註三〇）

（註二九）　最近における經濟狀勢　產業勞働時報　一九三一年四月號　四二頁

（註三〇）　檜六郎著　中小商工農業者は沒落か？更生か？　昭和五年七月刊　二―三頁

かくの如く無產大衆の經濟狀態は、その全面を通じて惡化してゐる。社會的不安と動搖とはこの基礎の上に立つてゐる。無產政黨は不振である。しかも、これらの社會的不安が何等かの力によつて組織せられ、社會改造の要求

となるとき、それは正に決河の勢を得るものといはねばならぬ。現下の無產政黨はその組織力を缺いてゐるが故に、その大をなさないのである。かく見來れば、わが無產大衆は社會運動のよき溫床といはねばならぬ。

六

日本はかゝる社會的狀勢の下において、その滿蒙進出を企圖したのである。故にそれは日本資本主義にとつては最も重大な問題であるといはねばならぬ。國內の狀勢はかくの如き企圖に適してゐないのであるし、また外國からの抗議干涉も受くべき地位にゐる。故に、かくの如き政策の强行は國內における諸勢力の充分なる統制を必要とするものである。滿洲事變を契機として、國內における社會統制、殊にファッショ的統制が著しく問題となり、その傾向が甚だしく顯著なのは、この必要によるのである。ファッショ化は、今や、單に、ジヤアナリズムの好題目としての存在のみではない。それは日本資本主義の局面打開の必要における一つの支配形態である。それは如何なる意義を有するか。

「ファシズムの本質は屢々誤つて定義せられた。その理由は一部分は、イタリーに於てファシズムが發生した政治條件が非常に複雜してゐた爲であり、一部分は多くの觀察者の見解が混亂してゐたが爲である。ファシズムは或は地主共によりて率ひられたテロリスト的運動であると謂はれ、或は單に興奮し易い青年士官達の向ふ見ずな振舞ひだと謂はれ、或は戰爭によりて、零落したる小ブルジョア的分子の絕望的發作である等と謂はれた。どの觀察者も たゞ運動の一面ばかりを見て、而も之を最も重要なるものと考へた。

だが、ファシズムにとつて、何が本質的決定的であるかといふことは、觀察者の眼は最初に映じたるものによりて、とりも直さず、金權政治反對の小ブルジョア的デマゴギーによりて決定せらるゝものでもなければ、又地主黨員擁護の行動によりて決定せらるゝものでも決してない。今日に於ては、ムッソリニーの獨裁が小ブルジョアの獨裁及び地主黨員の獨裁ではなくして、大產業資本及び金融資本の獨裁であることは如何なる觀察者の眼にも明かである。その充分に明白な證據の一つは、ファシスト政府の全經濟政策である。」（註三一）

（註三一）　パシュカニー　ファシスト獨裁の特質論　吉野・萬里共譯　ファッシズム論　昭和七年一月刊　一一二頁

ファッシズムが大產業及び金融資本の獨裁を意味することは今や一の定說とせらるゝが、（註三二）ファッショを以て祖國愛の發露として、資本主義的支配と見ない見解もある。「ファッショ運動は帝國主義國家においての問題であるどころか、これは打倒帝國主義の運動である！」といふ人もゐる。（註三三）しかしながらこれはファッシズムに對する浪漫的空想的觀方に過ぎないのである。從つて、かくの如き見解は寧ろ例外に屬するといつてよい。しかしながら、產業資本並に金融資本の支配一般、言葉を換へていへば「反動のすべての形態が『ファシズム』であるのではないといふことである。ファシズムは反動の一つの特有な特殊の形態である。」（註三四）即ち「ファシズムは資本主義が一定の發展段階に到達した國々において、今日迄にあらはれた最も首尾一貫せる且つ最も完全な反動の體制だといふことである。」（註三五）それはブルジョアジーに奉仕するすべての勢力の統一的組織による支配である。故にファッシズムにあつては、議會主義の價値は認められないのである。「資本主義制度の危機が尖鋭化すればするだけ、それだけ色々な

政黨――そのすべてが本質的にはブルジョアジーに奉仕するところの――の存在及びそれらの間の鬪爭は、ブルジョアジーにとつて一の冗物となり、もはやブルジョアジーはこれを容れることが出來なくなる。彼等が踏み出し得る唯一の救ひの道は、一の反動的地盤の上での一切のブルジョア的諸分派の直接的政治的統一の樹立である。」（註三六）

（註三二）佐々弘雄著　日本ファッシズムの發展過程　昭和七年四月刊　一〇頁以下　今中次麿著　獨裁政治論叢書　第三卷　ファッシズム運動論　昭和七年四月刊　一〇九頁以下

（註三三）室伏高信著　ファッショとは何か　昭和六年十二月刊　九〇―九一頁　室伏氏がドイツ國民社會主義の金貸資本の打破といふ點から「金融資本が世界的支配の現實となつてゐる以上ファッショが世界的となりつゝあるのはもとよりである。なぜかと問ふまでもない、ファッショとは金融資本の直接の對立物だからである。……產業資本主義のもとでマルクス主義が生れ、そして金融資本主義の段階においてファッシズムが生れた」（同氏著「ファッショかマルクスか」一八〇頁）とするのは、ドイツ國民社會主義の現狀を見ないものだ。

（註三四）エルコリ　ファッシズムの問題について　前掲　ファッシズム論　七五頁

（註三五）エルコリ、ファッシズムの問題について　八〇頁

（註三六）エルコリ　ファッシズムの問題について　前掲書　八四頁　ファッシズム本質の問題については、山川均　ファッシズム批判の批判　經濟往來　昭和七年五月號　七一頁以下

次に考察を要するのは、ファッシズム運動と中間階級の問題である。ファッシズム運動を中間階級運動とする者は次のやうにいつてゐる。「ファッショは本質に於いて、ブルジョアジーに對する中產階級の反擊である。資本主義の高度的發展は中產階級の生活を不安に陷れる。彼等が經濟的特權を獨占する大ブルジョアジーに對して反感を抱くのは必然である。即ち彼等は反資本主義化して來た。更に中產階級は健全なる國民意識の所有者である。……彼等は熱烈な愛國者である。……國家の現狀は、一日立てば一日立つほど、國民精神を弛廢せしめ、國家機構を混亂せしめ、國民的生存權を不安に陷れることになる。一方に對外關係が險惡化しつゝあるとき、彼等愛國者が斷乎たる國家改造の念を抱くに至ることは當然の過程といはねばならぬ。……こゝにファッショの進擊がある。」（註三七）この見解はファッシズムの現象形態の外面だけを觀察したものに過ぎないのである。ファッシズムは中產階級運動の形態を採り得る。しかしながらその本質はこゝに存しない。「ファッシズムはあくまでもブルジョア覇權確立のための運動であつて、斷じて中間階層のための運動ではあり得ない。假りに中產階層のための運動として發芽するファッシズムがあつたとしても、ブルジョア階級と結緣しない限り、それは根のない草花であつて、早晩枯死せざるを得ない。」（註三八）杉山氏はこのことを實證的に說明してゐる。しからば、ブルジョア覇權確立の一タクチックであるファッシズムが如何なる理由によつて中間階級を把握し、中間階級的運動たる色彩を採るか。それには、中間階級の心理的要因がある。杉山榮氏の文章を借りよう。「中間階層はイデオロギーにおいても、實行においても、プロレタリアとも同一の範疇に入ることを好まず、反對にブルジョア階級に潛入しようとする强い欲求を持つてゐる。從つて中間階層運動を標榜しながらも本質的にはブルジョア運動であるファッシズムがひとたび其の手を差し延ばすと、中間階層はすぐに其の手に抱かれるのだ。加ふるに、中間階層はブルジョア及びプロレタリアのいづれよりも容易な途を歩みたがるが、プロレタリア運動の途は崎嶇曲折し、ファッショ運動のそれは比較的平坦である。」（註三九）その外中間階級層の服從心生活不安

に對する强大な勢力といふ心理的要因が擧げられてゐる。

（註三七）赤松克麿　ファッショの脅威　經濟往來　昭和七年五月號　一九六頁

（註三八）杉山榮　ファッシズム心理學　經濟往來　昭和七年六月號　二一六頁

（註三九）杉山榮　ファッシズム心理學　前掲　二一六―二一七頁

この點で中間階級を最も正確に分析し、その本質を明かにしたものは、マルクス、エンゲルスである。エンゲルスは一八四八年前後の形勢に關していふ。「ドイツでは一階級としての大きな資本家及び製造業者の發達が阻害された結果として、小商工階級が非常に多數である。大都會では、これが住民の殆んど過半數を占めてゐるし、小都會では、一層富裕な競爭者のないために、すつかり優勢を占めてゐる。この階級はあらゆる近代國家において、又すべての近代革命において、最も重要な階級であるが、殊にドイツでは一層重要な地位を占め、現に最近の鬪爭中も、一般に決定的役割を演じたのである。この小商工階級は大きな資本家や商人や製造業者、即ちいはゆる本來のブルジョアジーとプロレタリア階級、即ち勞働者階級との中間に位してゐることが、この階級の性質を決定する。この階級に屬する個人は、ブルジョアジーの地位にあこがれながら、ほんの些細な不運で後者の仲間に投げこまれてしまふ。君主國家や封建國家では宮廷や貴族の愛顧が此の階級の存在の必要となる。この愛顧を失へば、その大部分は滅亡する。小都會では、兵營とか、地方政廳とか、裁判所とか、が甚だ屢この階級の繁榮の土臺を成してゐる。これらを引き去つて見たまへ。たちまち小商人の、裁縫師や、靴屋や、指物師は沒落してしまふ。かくて此の階級は、富裕階級の仲間に入りこまんとする希望と、プロレタリア又は甚だしきは細民の狀態に落ちこむ恐怖との間にまた公務の管理に割り込んで自己の利益を增進せんとする希望とまづい時に反對して、彼等の最上の顧客を取り去る力を持つてゐるために、彼等の生存そのものを左右するところの政府の怒りを買ふ怖れとの間にはてしなくも動搖する。その所有する資產は僅少で、その所有の不確實なことはその所有の高に反比例する。かくて彼等の見解は極めてぐらついてゐる。强力な封建政府または君主政府の下では身を卑下して、はいつくばるやうに從順であるが一旦中等階級が勢ひを得れば、たちまち自由主義の側に身をかはす。中等階級がその支配權を確立するや否や、激烈な民主的發作に襲はれるが、然しまた自分自身の下にある階級、プロレタリアが獨自の運動を企てるや否や恐怖のためにあさましい意氣阻喪に逆もどりするのである。」（註四〇）これは一八四八年前後のドイツ中間階級の本質の描寫であるが、彼等の本質に對する觀察は、例へ、現在においては、その社會狀勢が變つたことを計算に入れても本質的なものを持つてゐる。中間階級の本質の最も正確な表現である。

（註四〇）エンゲルス　革命及び反革命――一八四八年におけるドイツ――市川正一譯　昭和三年二月刊　九―一一頁

故にエルコリもいつてゐる。ファッシズムは「單なる反動的運動ではなくて、その起源及び發展から近代社會の敵對的階級たるブルジョアジーとプロレタリアートの一定の配列と關連してゐるばかりか、更に殊にこれら基本的階級とその中間に動いてゐる中間層との間の關係の配列と關聯してゐるところの一の反動運動」である。（註四一）

（註四一）エルコリ　ファッシズムの問題について、前掲書　八六―八七頁

しからば、ファッシズムの思想的内容は何か。それは一の國家主義といふことが出來る。エルコリは、ファッシズム・イデオロギーの内容を極めて正確に把握してゐる。「第一、國家は全社會生活のそれのあくまで種々な現象における決定的要素たらねばならぬ。第二、國家に對するとき市民は何等の『權利』をも有しない。何故なら凡ゆる權利の起源は國家にして個人の意識にあらざるがゆえに。第三、國家は階級を超越せる一有機體である、階級はそれが存するかぎり、國家によつて、一切この根本法則の見地から見られ取扱はれる。第四、階級闘爭は國家の指導下において、一の組織の中で解決される、この組織中には生産の色々な因子が生産の最良條件と生産物の最正の分配の條件とを確定するために、直接かつ有機的に協働する。かゝる組織は協同體的國家である。」（註四二）かゝる内容としてのファッシズム・イデオロギーは多く國家主義と社會主義との統一なき混合であるが、それは勿論ファッシズムの本質である最も統制せられたブルジョア的支配に奉仕すべきは明かである。それは理論としては、無價値または價値の低いものである。しかし、それのイデオロギーとしての存在は否定出來ない。（註四三）（註四四）

（註四二）　エルコリ　ファッシズムの問題について　前掲書　九六頁

（註四三）　戸坂潤　イデオロギーとしてのファッシズム　思想問題　昭和七年五月號　ファッシズム特輯號　二三―二九頁

（註四四）　ファッシズムに關する邦書には註で擧げた外に次の如きものがある。

リッペー、マルチノフ　ファッシズム研究　磯貝實譯　昭和七年六月刊

アキラ、廣島定吉譯　伊太利に於けるファッシズム運動　昭和二年六月

藤井悌著　ファッシズム　昭和四年六月

室伏高信著　ファッショ治下の伊太利　昭和六年十二月

ニン、ツェトキン著　ファッシズムに對する勞働組合の闘爭　昭和七年四月

北郷逆譯　反ファッシズム闘爭　昭和五年十二月

ラピンスキー著　プロレタリア科學研究所ソヴエート同盟研究會譯　第三期と社會ファッシズム　昭和七年四月

七

日本におけるファッシズムの擔當者は誰か。現在ファッショは流行の狀態であるが、ファッショなる言葉が一の輕蔑の意味を持つてゐたせいか、自らファッショと宣言してゐるものは、本年二月に創立された「日本ファッジズム聯盟」位に過ぎないのである。（註四五）國家社會主義者は自らをファッショと呼ばれるとしても、そのファッショが他のファッショと異る所以を次のやうに宣言してゐる。「今日俗に漠然と『ファッショ』と呼ばれてゐるものには、二つの流れがある。根本に於いて資本主義を肯定するものと、根本において、資本主義を否定するものとの二つである。前者は即ち吾々以外の『ファッショ』であり、後者は即ち我々の『ファッショ』である。我々を『國民ファッショ』と言ふならば、前者は正に『ブルジョア・ファッショ』と呼ばるべきものであり、結局資本主義の擁護である。言葉の全き意味において、前者は『國家資本主義』であり、後者は『國家社會主義』である。」（註四六）

（註四五）　雜誌ファッシズムを三月以降刊行す。

（註四六）　所謂ファッショについて　日本社會主義　昭和七年四月號　一頁

この區別の當否はここに論ずることを必要としない。吾々がファッシズムについて與へた根本的原則から各種の運

動を類別して行けばよいのである。日本において、ファッシズム發生の社會的基礎が存在し、これに照應する運動の起つて來たことは事實であり、廣く認められてゐるところである。（註四七）しかしながら、廣く理解されてゐるところのファッシズム運動をファッシズムにあらずと論斷する人に室伏高信氏がある。「日本においてファッショといはれてゐるものは以上二つの點――滿蒙進出贊同及び〇〇政治――において特質をもつてゐる。そしてこの二つともにファッショの反對原理である。日本においてファッショといはれてゐるものはファッショではない。これは國民社會主義ではなくて帝國社會主義である。帝國は國民ではなく、國民の發展でもない。國民が帝國へと發展したものと假定しよう。われ〳〵は既にいつてゐる。これはファッショではないと。ファッショでないどころではない。これはファッショが戰はねばならないものである。なぜならファッショのもとめてゐるものは血の純潔である。日本ファッショといはれるもののもとめてゐるものは血の不純化である。一つの民族は血の純潔であるが、複合民族は血の破壞である。」（註四八）この室伏氏の立場は純粹な民族主義である。今日の日本におけるファッシズムは勿論かくの如きものではない。またかくの如きものたり得ない制約を有するのである。氏はファッシズムにおいて、民族自治主義の立場を求め、それが、ブルジョアジーの統一的支配體制として與つて來た制約を無視してゐる。ファッシズムと呼ばれる運動が、氏のファッシズム概念と正反對の立場にあることこそ、日本ファッシズムがその根抵において何ものなるかを示す好個の根據である。この點において、氏の說明は逆說的にいつて極めて面白い見方であるといふことがある。

（註四七）　佐々弘雄著　日本ファッシズムの發展過程
日本に於けるファッシスト政黨とその運動　產業勞働時報　昭和七年三月號
滿洲侵略戰爭と社會ファッシスム　プロレタリア科學　昭和六年十二月號
日本帝國主義のファッショ陣營の編成　プロレタリア科學　昭和七年三月號
日本ファッシズムの現狀と批判　財政經濟時報　昭和七年六月號
岡田怡川著　ファッシズムと日本の文化及教育　昭和七年五月刊
日本ファッシズムの特質　思想問題　昭和七年五月號

（註四八）　室伏高信氏　日本ファッシズムの特質　思想問題　五月號　六九頁

ファッシズムは普通にファッシズム・プロパーと社會ファッシズムに分類されてゐる。ファッシズム・プロパーは既に述べたやうに、國粹主義の外觀によるブルジョアジーの統一的支配體制の一樣相であるが、社會ファッシズムもその本質によりて、これと異るところはない。たゞこれと異るところは、前者が傳統道德、國粹主義の一點張りになるに對して、後者がファッシズムの外觀を社會主義、殊に國家社會主義の包裝で包んでゐる點である。兩者の差異はその外觀を除けば、そのファッシズム的機能分業である。前者は中小並に無產市民層の獲得をその目的とし、後者は、その社會主義的外裝によつて、改良主義の指導者を通じて社會主義的意識を有する勞働者層を獲得しやうとするものである。（註四九）

（註四九）　ラピンスキー　第三期と社會ファッシズム
ファッシズム・プロパアと社會ファッシズムの區別の如きは、少くともその揭げる綱領から見るときには、多少明瞭の

やうに思はれる、しかしながら、その他の類別は何時も多少の困難を伴ふやうである。今分類の一二を擧げて見やう。第一は佐々弘雄氏のそれである。（註五〇）

ファッシズム
- （1）××官僚ファッシスト
- （2）國粹ファッシスト（反動諸團體）
- （3）國民ファッシスト（國民社會主義者）
- （4）社會ファッシスト

第二は財政經濟時報の分類である。（註五一）

日本ファッシズム
- （一）國粹ファッシスト　國本社、愛國勤勞黨の如きもの
- （二）議會ファッシスト　協力內閣運動
- （三）中產ファッシスト　大日本生產黨、國民社會黨準備會
- （四）社會ファッシスト　赤松氏の國民社會主義

第三は中島清氏の分類である。（註五二）

旗手　直木
- 日本主義的社會主義　大日本生產黨その他の從來の反動者流
- 社會國民主義　中野正剛氏等
- 國民主義的社會主義　下中、赤松、島中、坂本、近藤等無產黨から出直した人々

（註五〇）佐々弘雄著　大衆政治讀本　昭和七年三月　二九八頁

（註五一）日本ファッシズムの現狀と批判、財政經濟時報　昭和七年六月號　一〇三頁

（註五二）中島清　ファッシズム研究　勞農　昭和七年三月號　三三頁

すべの現象の分類は多く困難を伴ふことを免れ得ないが、この場合にもさうである。例へば、佐々氏の場合軍部、官僚ファッショと稱するものと國民ファッショと稱するものとの區別は明瞭ではない。現に今回の臨時議會に於ける一貴族院議員の質問に對して、陸相荒木貞夫氏は小壯軍人と國家社會主義者との關係の存することを認めてゐる。勿論軍部ファッショといはれるものにも、二三の潮流があることと思はれるが、以上の如くであるとすれば兩者の區別は意味をなさぬ。財政經濟時報記者の分類についていへば、中產ファッショなるものと國粹ファッショなるものとの區別は解し得ない。殊に擧げられた大日本生產黨の如きは、その綱領には何等國家社會主義を示すものを有たないにも拘らず、その理論的指導者津久井龍雄氏の如きは「日本的社會主義の提唱」といふ小冊子を出してゐる。といふが如き曖昧な態度である。これ故に、中島氏は大日本生產黨をもつて日本主義的社會主義の中に分類してゐるのである。而して、その社會ファッショの概念についても、例へばマルクシストの立場からすれば、社民黨も――赤松氏の脫退派を含めての――勞農黨――近藤榮藏、坂本孝三郎氏等の轉向派を含めての――も何れも社會ファッショでないものはないのである。（註五三）而して、前揭佐々氏の分類中の社會ファッシストとは、この意味に用ゐられたのであらう。以上のやうな觀點の下に筆者は

日本ファッシスト
- A ファッシスト・プロパア
  - （一）國粹ファッシスト
  - （二）議會ファッシスト
- B 社會ファッシスト
  - （三）（一）國民ファッシスト
  - （二）無產黨ファッシスト

の如き分類をして見たならばどうかと思ふ。勿論この分類も正確ではない。何となれば、自ら理論家たることを潔しとしないで、行動家たることを自認するファッショ的傾向を有する人々は、その理論的立場において、明確な概念を持つてゐないからである。右の分類に從つて、日本ファッシズムの負擔者である各團體を分類して見やう。いふまでもなく、これは大體の分類である。（註五四）

（一）國粹ファッシスト

日本ファッシズム聯盟
五日會（直木三十五氏等）
行地社（大川周明氏）
士林莊（北一輝、西田稅氏）
立憲養正會（田中澤二氏）
國粹大衆黨（笹川良一氏）
神武會（大川周明、狩野敏氏）
國本社（平沼麒一郎、荒木貞夫氏）
國維會

（二）議會ファッシスト

若槻內閣崩壞期における協力內閣運動中野正剛氏の社會國民主義

（三）國民ファッシスト

さくら會（軍部少壯將校）
大日本生產黨　內田良平、津久井龍雄氏等
國民社會黨準備會（下中彌三郎氏）——新日本國民同盟
國家社會主義新黨準備會（赤松克麿氏）——日本國家社會黨
日本社會主義研究所（石川準十郎氏）
日本社會主義學盟（林登米夫氏）

（四）無產黨ファッシスト

社會民衆黨　松岡駒吉氏の產業奉還論の如きは明かなる社會ファッシストといはれる。
全國大衆黨　松谷與二郎氏の如き滿蒙權益確保論

日本共産黨勞働者派（所謂解黨派）

（註五三）プロレタリア科學　昭和六年十二月號　二頁以下

（註五四）とゝに擧げた結社名は主として次の如き材料による。

國守健　戰鬪的日本主義戰列の組織と人物、社會運動往來　昭和七年六月號　一丸頁以下　同誌同號四一頁以下

日本に於けるファッシスト政黨とその運動　産業勞働時報　一九三二年　三月號

石濱知行　日本國民社會主義の諸潮流　改造　一九三二年五月號　五四頁以下

愛國主義陣營の展望　文藝春秋　一九三二年六月號　一六四―一七四頁

最近の我國社會運動　四〇一頁以下

日本經濟年報　第八輯　二七五頁以下

社會運動通信　（日刊）

日本ファッシズムの現狀と批判　財政經濟時報　六月號

八

これらのファッショ的傾向には共通點があるか。勿論ある。土田杏村氏は「最左翼のマルキシストは國際主義的であつて、國民主義的、國家主義的ではない。それ故に彼等は、何等か國民主義的な傾向を取る人達を呼んでファッショといつたのです。國家社會主義者がファッショと呼ばれたのもその爲めである。」といつてゐるが、それもたしかにファッシズムの一特徴である。（註五五）而して、この國家主義的國民主義的とは何を意味するかは、直木三十五氏が軍部の人々と會見後に書いた短文によく現はふことが出來る。

「一、ワシントン條約の廢棄――これは明かに國辱條約である。

二、歐洲大戰以後に現れたる平和思想のために誤られたる外交官の强硬教育。

三、支那を特殊國と見て、特殊國として取扱ひ對策する事――戰爭も可である。

四、日本人の如きいゝ人間が、廣大なる無用の地を所持してゐる支那へ進出して行く事は人類のためにも、支那人のためにもいゝ事である――それにはいろ〳〵意見がある。

五、必然としては右は東洋モンロー主義となり、帝國主義となるが、それが、日本の生存上、支那といふ隣國の存在する限り、唯一の方法である。思想的には古くてもそんな事はかまはない。

イ、資本主義の打倒

ロ、現在の如き政黨政治の否定

ハ、インタアナショナル的思想の否定――プロ派には正面から挑戰する。……

右の三種は外國のファッシズムも同じである。そしてこの第一が結果として資本主義との妥協となり、援護となるから、共産黨などは罵倒するが、私は信じる、結果など、今考へなくてもいゝと。一番入用なのは『力』だと。」（註五六）

この直木氏の文章は最も鮮かに日本ファッシズムの根本的要求を表明してゐる。直木氏は別の場所で次のやうにい

つてゐる。「僕は資本家は嫌ひだが、資本主義には他にないよい所があると信じてゐる。例へば、撫順炭礦などで、支那の苦力を澤山使役して、勞銀を安くすませる。これなどは勞銀の高い日本人を使ふより遙かにいゝと思つてゐる。安い苦力によつて、掘り出された石炭は安く大量な捌け口があらう。つまり販路を廣く品物を安くすれば、それだけ日本が富んで行く。こんな處に資本主義の大變好もしい姿がある。」（註五七）これが直木氏の資本主義觀である。支那苦力搾取すべし。日本の失業者は放つて置け。これは確かに日本勞働者の「戰慄」である。しかるに撫順炭は日本に安く入らないやうに協定が出來てゐるのである。小說家直木氏はそんな事實は知らぬでも濟むかも知れぬ。直木氏の資本主義打倒の根本思想はこの程度のものである。この內容が土田杏村氏の所謂國民主義的、國家主義的なるものであり、（註五八）室伏氏をして日本ファシズムはファッショにあらず「帝國社會主義」であるといはしめたものである。（註五九）かくの如き意味において、國民主義は一のファッシズムの重要な基礎である。

（註五五）現代世相論　二七頁
（註五六）直木三十五　軍部との會見　東京日日新聞　昭和七年二月十一日
（註五七）早春ファッショ談　ファッシズム　昭和七年三月　第一號　六頁
（註五八）前掲
（註五九）日本ファッシズムの特質

國粹ファッシストはいふ。「少くとも日本ファッシズムは先づわれわれ日本人がめいめいに抱いてゐる日本人意識――俺は日本人だぞ、俺は日本人、日本の國民だといふことに於て始めて人間だといふ考へをしつかり把握して、一つの民族的信念の下に團結して、強い團結の力で社會正義を主張して　國を强くして行かう、われわれ國民も共存共榮、お互に幸福にならう、生活も確保して行かう、といふ一大國民運動を起さう、それがその根本精神である。……そこで日本には、日本獨自の日本ファッシズムが現はれなければならない。日本獨自のとは、世界における日本の立場、日本國內の政治、產業、敎育、宗敎、軍事等々を綜合した客觀的狀勢を考察すると共に、日本人、日本國民といふものを歷史的にも傳統的にも、文化的にも、全部的に理解會得して、イタリイ的でも、ドイツ的でもロシア的でも、アメリカ的でもない「全體日本」を見出し、すべての思索の、行動の根幹をこの點に置くといふことである。」（註六〇）また大日本生產黨が「大日本主義を以て國家の經倫を行ふにあり」といふ主義を樹てたのも、これに均しい。

（註六〇）日本ファッシズム早わかり　ファッシズム　第一號

この國民主義的傾向は社會ファッシスト的傾向を有するものにあつては、共產主義インタアナショナルの否定となつて現はれる。「マルクス主義的インタアナショナルの誤謬は、人願の鬪爭歷史を階級的にのみ認識して之を民族的又は國民的に認識せざる所にある。故に彼等の主張によれば、各國プロレタリアートは各國のブルジョアジーとの間にのみ階級的利害の不一致があつて、各國のプロレタリアートの間には國際的利害の不一致はないのだから、各國のプロレタリアートは國際的統一戰線を形成しつゝ、各國のブルジョアジーに對して階級鬪爭を敢行してゆけばよいことになる。こゝにインタアナショナルといふ統一的國際協力の可能性と妥當性とが生じてくる譯である。マルクス主義的インタアナショナルに反對する我々は、各國のプロレタリアートは、階級鬪爭と共に民族鬪爭の渦卷きを

も脱することは出來ないと認識するが故に、共産黨の主張するが如き國際的統一戰線を形成することは不可能なりと認める。從つて、現に存在する第三インタアナショナルの如きは、眞の意味における各國無産大衆の國際的團結ではなくして、ロシア共産黨を中軸として、これに迎合する各國の極少數のプロレタリアートの統一戰線に過ぎないものと斷言する。」（註六一）第三インタアナショナルは更らに苛酷な批評を浴せられてゐる。「共産黨の、萬國の勞働者團結せよのスローガンはかくて今日では、全く一個の滑稽なるナンセンスと化してゐるが、併しそれは實際においては、ナンセンス以上に、一種の積極的な意義を帶びてゐる。それは何かと云へば、それが一個の勞農帝國主義の侵略的爪牙の役目を果してゐることである」と。（註六二）

（註六一）　赤松克麿著　新國民運動の基調　昭和七年四月刊　三一―三二頁

（註六二）　津久井龍雄著　日本的社會主義の提唱　四〇頁

インタアナショナルの否定は、全部的なインタアナショナルの否定ではない。然り、彼等は新らたなインタアナショナルを起せと主張する。

「吾々は日本中心のインタアナショナルに反對すべき何等の理由はない。そして日本が、あらゆる意味でインタアナショナルの中心として、今日の世界列國中最も適格であることを自任するに躊躇すべき理由は尙ほ更らない。日本を中心とする第四インターを起せ！、我々はそう叫ぶ、そう叫ぶことの必要を痛切に感ずる。アメリカはドルによつて、イギリスは海軍によつて、ロシアは共産主義によつて、世界進出、世界併噬を計る。日本は國體の發揚によつて、國家正義の發現によつて、世界進出を計るべきだ。」（註六三）「日本無産階級のとるべきインタアナショナルはアジヤの被壓迫民族を統一する第五インタアナショナルでなければならぬ。第五インタアナショナルは總花的インタアナショナルではなくして、强大民族と弱小民族との鬪爭を肯定するものだ。しかして、この新インタアナショナルの主動的地位に立つべきものは、わが日本であるが、これがためには第一歩として、先づ資本主義日本を打倒して、社會主義日本の建設に急がねばならぬ。」（註六四）

（註六三）　津久井龍雄　前揭書　五六頁

（註六四）　赤松克麿　前揭書　五二―五三頁

インタアナショナルの否定は、引いて、共産主義の否定である。この共産主義の否定は、全ファッショ陣營を通じての共通的態度である。この態度はたゞに日本ファッショのみならず、國際的ファッショ全體を通じての共同鬪爭指標である。ファッショ運動の最も主要なる標的は反共産主義であるといふべきである。この意味において、第三インタアナショナルの否定は、その對極たる帝國主義の主張であると共に、共産主義反對である。

インタアナショナルの否定、而して、新インタアナショナルの創設、これは赤松氏のいふやうにアジア・インタアナショナルへの主張であり、大川周明氏などの大亞細亞主義と相通ずるものがあるであらう。而して、この經濟的根據をなすものは、わが國の生産資源缺乏論である。「一個の自主的國民經濟の建設には、一定量の資源を必要とする。資源は一國經濟の基礎條件である。資源貧弱なる國民經濟は資本主義的立場をとつても、發展性が少ないこと

は勿論、社會主義的立場をとつても、國民生活の安定を期することは困難である。資本主義日本の行き詰りが、先進資本主義國家の行詰りよりは顯著である。根本原因もこゝにある。世界の資源をアメリカ、イギリス、ロシア、支那等の國々が獨占してしまつて、資源貧弱なる日本が侵略主義の非難を恐れて、世界平和のために、いつまでも、營養不良の生活をしなければならぬ義務はない筈だ。」（註六五）この資源缺乏論及びその獲得論が、いかに、所謂「輿論」となつた滿蒙は日本の生命線といふ常識的主張に近いかを知ることが出來やう。日本國民社會黨準備會の綱領に「我黨は人種平等資源衡平の原則の上に新世界秩序の創造を期す」といひ、愛國勤勞黨は「吾黨は日本民族の世界的使命を高唱し、人種平等資源衡平の原則の上に國際正義の確立を期す」と宣言してゐるのと同じである。それは、世界再分割の主張である。そしてその先頭に日本を起たしめやうとするのである。それは、クーデンホーフの世界五大ブロック國家論の燒き直しであり（註六六）從つてブルジョア的イデオロギーである。

（註六五）　赤松克麿著　前揭書　七七頁

（註六六）　クーデンホーフ著　汎ヨーロッパ

國民主義を標榜するファッシズムは、一の全體主義的立場にあるので、黨派、階級の觀念を斥ける。日本ファッシズム聯盟はその宣言にいふ。「腐敗混濁せる政黨閥族の跳梁は橫暴極りなき非國民的資本國と相結び、私慾黨利の爲めに、政權爭奪にのみ腐心し、私黨交互に國政を壟斷して餓虎の如き對立抗爭を之れ事とし、國家民人の安危は棄てゝ顧みず、吾等祖先の地、今や山河淸徒らに長てにして餓孚到處に橫はるの狀、眞に忍ぶ能はざるものがある。無能無產政黨に至りては、大衆の利福擁護を叫び乍ら、私鬪內訌の限りを盡くし、彼の詼り哄ふべきイデオロギーの名において勞働者を愚弄し、農民を破滅に導くに過ぎず。……吾々はお互に手を携へて政黨閥の欺瞞と資本閥の搾取から解放されたる新日本を提げて世界に勇飛するまで戰つて戰ひ拔かうではないか。」（註六七）

（註六七）　日本ファッシズム第一宣言　日本ファッシズム　第一號　一三頁

日本國民社會黨準備會は新黨の性質として「一、國民主義の黨たること、一、反資本主義の黨たること、一、單なる選擧黨ならぬこと」を規定してをり、民主主義政治について、下中氏の演說中次のやうにいつてゐる。「斯かる資本主義末期の惱みは世界的にはこゝ四・五十年間、日本的には、二十年間に亘つての民主主義政治の所產なのであつて、世界經濟の破綻―延いて日本の經濟的行詰りは國民生活を底知らぬ恐怖に曝らしてしまひ民主主義政治夫れ自身この經濟的苦境を救濟すべく全く無力だと云ふ事を暴露したものであります。」（註六八）

かくの如き見解は、愛國勤勞黨が「吾黨は資本主義の傀儡たる特權政黨と國性を無視せる無產政黨とに鋭く對立し、之が克服を期す」をいひ、大日本生產黨がその政治綱領において「金融財閥の寄生蟲政友民政兩黨の絕對排擊、共產黨、全協、亞流共產黨（全國勞働大衆黨）社會民主主義黨（社會民衆黨）の排擊」を高らかに揭げてゐるのに照應してゐるのである。かくて、政黨政治の排擊はファッシズム全體の傾向なるかの如くである。しかし、協力內閣運動の主張者中野正剛氏等の主張は、議會政治の單一支配化によつて、ファッショ的傾向のブルジョアジーの要求に應ぜんとした點においては、所謂政黨政治家の憲政常道論から離れたものといはねばならぬ。

（註六八）日本國民社會黨準備會々報　第一號　昭和七年一月二十八日

かくの如く、日本ファッシズムに共通する要素は第一には、滿蒙問題を契機とする國民主義である。この國民主義は一の帝國主義であることは、赤松氏が帝國主義は強大國民の國民主義であるといふに徴しても明かである。（もつとも、赤松氏はアジア・インタアナショナルの首班に座すべき日本を強大國民の内に數へてゐないが！）（註六九）而して、この國民主義の遂行に當るものは、既成議會政治家ではない。その勢力は何であるか。日本ファッシズム聯盟の的野巖氏は「現在世界のどんな強國と言ふたる國々においても、我日本の如く最も強い、最も組織だつた軍隊を持つてゐる國は絶對にないと言つて過言ではないと思つてゐる。此の軍隊の存在が日本には日本獨自のファッシズム運動が生れなければならない所以である」といつてゐる。（註七〇）國粹ファッシズムの指導者橘孝三郎氏は、改革運動が常に「志士」によつてのみ行はれることを主張し、かくの如き志士が軍人層に出づべきことまた出でざるべからざることを主張する。「國民社會的革新はたゞ救國濟民の大道を天意に從つて歩み得るの志士の一團によつてのみ開拓さるゝものであるといふ一大事であります。此所に革新本義に對する要石が据え置かれてあるのであつて、眞の革新はこれを缺いて成立したためしは未だ歴史に少しも示されておらないのであります。かやうな大事をたゞ一死以て開拓いたすなどといふ志士は申すまでもなく何時の場合でも、數において、多くを求め得るものではありません……而して、日本の現狀に訴へて見る時、何處よりも先に皆樣の如き軍人層にかやうな志士を見出す外ないのであります。そして之に應ずるものは何よりも農民です。」（註七一）

（註六九）赤松克麿著　前掲書

（註七〇）的野巖　聯盟創立まで　日本ファッシズム　第一號　一四頁

（註七一）橘孝三郎著　日本愛國革新本義　昭和七年五月刊　七八―八一頁

總じてファッショ的傾向の軍隊禮讃によつて、この政黨排擊の内面的意味を知ることが出來るであらう。かくて、國民主義と非政黨主義とは、日本ファッシズム――それはまた國際的ファッシズムも然りである――の共通點であるといつてよい。而して、これらのイデオロギーは、現在日本の中堅を形成してゐる年配の人々の教育されたイデオロギーであり、且つこれらの人々の屬する中間階級層が經濟的壓迫を受けることが甚大であるから、既に記したやうな（一）理的基礎の上に、ファッシズム支持者層は次第にある程度まで增大するであらう。しかし、それは本質論において明かなやうに、決して、日本新理想社會の建設に到らないであらうことは、一〇〇パアセントの確率をもつて斷言することが出來やう。

附記　以上論じたところは日本ファッシズムの序説に過ぎないのであつて、例へば國粹ファッシズムの哲學的根據――日本主義の哲學――といふべきもの、及びその個々の主張内容も檢討してゐない。更らに國民社會主義の方面はその成立過程理論、等について、更らに詳細に記述批判すべき筈であつたが、總論の部で意外の紙數を費したので、他の機會に讓ることゝした。ファッシズムの一要固たる國民主義の問題については、更らに新刊拙著「國民主義と國際主義」（世界經濟問題叢書第四編　同文館）を參照せらるゝことを望む。本論文は、それに對する一の補遺とも見るべきであらう。

一九三二年五月十四日稿了